

ハギモトハルヒコ夢のコンサート05

— 2005・3・7

— 日本大学カザルスホール — 写真・文 二本之下晃

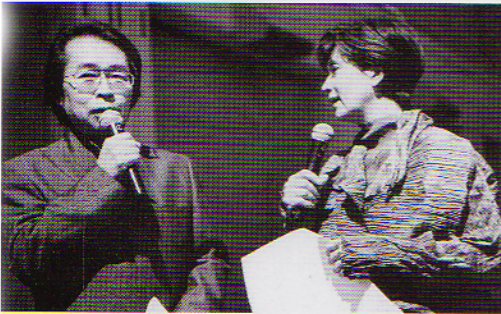
萩元晴彦氏が亡くなって5年。もし彼が生きていたら今年で75歳になるその誕生日に、追悼「ハギモトハルヒコ夢コンサート」が開催された。

テレビ・プロデューサーの萩元氏は、70年にTBSを退社してテレビマンユニオンの設立に参加。そのテレビマンユニオンで「オーケストラがやって来た」を72年10月から83年3月まで放送。テレビを通じてクラシック音楽を一般の視聴者に、親近感を持たせる新規の番組を拓いた。その間、78年には小澤征爾と中国へ

同行して「北京にブラームスが流れた日」小澤征爾・原点へのタクト」を制作。同年7月23日にTBSで放映。それは文化革命後の中国に初めてクラシック音楽が流れた得難いドキュメントとなった。また81年にはカラヤンをヨーロッパで取材。「カラヤンとベルリン・フィルのすべて」を同年11月2日〜6日TBSで5夜連続放送した。その映像はそれまでヨーロッパで作られたカラヤン映像を越える新鮮な視点で、海外での評価も高かった。それらの実績が蓄えとなって、86年サントリーホールが誕生した時、オープニング・シリーズ



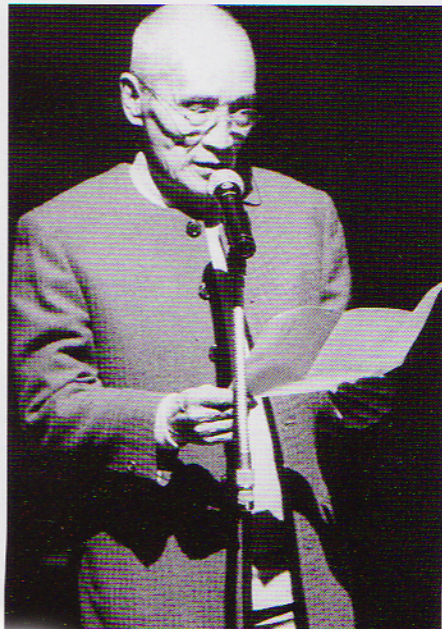
▲今井信子「鳥の歌」（世界初演）



▲司会：西村朗+マリ・クリスティューヌ



▲ob 久寿米木知子 + vn 川崎洋介 + vc 辻本玲 + va 川本嘉子



▲朗読：谷川俊太郎

スの総合プロデューサーとなり、クラシック音楽界に初の本格的プロデューサーのあり方を確立。87年からカザルスホール総合プロデューサーとして、同ホールを個人的なホールに育て上げた。特にカザルスホールで、氏がプロデュースした企画の一つとして、今までヴァイオリンの隆になっていたヴァイオラに日の目を当てる「ヴァイオラ・スペース」を立ち上げて、今井信子などのヴァイオラ奏者に活躍の場を広げるなど、ユニークな発想がその後のクラシック音楽の世界に幅の広さを与えたことは衆目が認めるところである。

今回、その秋元氏を偲んで、旧交を重ねた小澤征爾、谷川俊太郎などの友人が音頭を取って、縁りの人たちが集まって一夜をたのしむコンサートが開かれた。プログラムは、カザルスホールで日曜日マチネーコンサートの司会をしていた作曲家の西村朗と「オーケストラがやって来た」の司会者マリ・クリステイヤヌの二人がナビゲーターとなつて、この日のために谷川俊太郎が作詞した作品を自ら朗読。西村がカザルスの作品を編曲、秋元氏に捧げた新作「鳥の歌」を今井信子が世界初演するなど、新鋭からベテランまでが集つて、J・S・バッハ、モーツァルト、ピアノラ、R・シュトラウスなどを演奏。心和むひとときが持たれた。このコンサートは好評で毎年開かれることになった。



▲vn 川崎洋介、島田真千子 vc 山崎伸子、辻本玲 va 川本嘉子、今井信子 cb 今村晃



▲御喜美江+ゲオルク・フリードリッヒ・シェンク



▲作曲：西村朗+va 今井信子